# 第４学年　国語科の実践

１　単元名　場面をくらべて読もう　「一つの花」（今西　祐行作）

２　単元目標

〇叙述から想像を膨らませて読み、読み取ったことを進んで話し合おうとすることができる。【関心】
〇一つの花に込められた父の想いについて自分なりの考えを持ち、友達の考えと比べることができる。
【読むこと】
〇登場人物や場面の様子を叙述をもとに、想像しながら読むことができる。【読むこと】

３　ひびき合う子どもたちを目ざすための指導の工夫

（１）　単元と指導について

①　教材について

この物語は大きく二つの場面に分けられる。戦争が激しくなり、食べ物もろくに手に入らない中、体の弱い父も戦争に行かなくてはならなくなってしまった戦争末期と、終戦から十年がたち、粗末な家に住みながらも、平和に母と暮らしている時代の二つである。

場面の構成の抑え方として、いくつか物語に沿っているキーワードの入った短文の短冊をランダムに並べておき、それをあらすじ通りに並ばせる。それによって、子どもたちはキーワードを頼りに並べようとするはずである。「食べ物」「ゆみ子の言葉」「父親がいるいない」などのキーワードを自然と探し、場面が大きく変わっていることに気づく子がいるはずである。それによって、時・場所・登場人物といった物語全体の概要を理解するだろう。

そして本教材は戦争を背景に、過酷な状況の中で、子を想う親の愛情や願い、それを受けて明るく育った子の成長が描かれている。ゆみ子のこれからを心配する両親の愛情を、第三者的視点から語られている。家族の心情は、直接的に表現されることがなく、第三者が想像する表現が使われており、子どもたちが初めて学ぶことになる。また「―」（ダッシュ）を使った余韻部分も多用されている。これらの文の構造に目を向けさせ、情景を思い浮かべたり、登場人物の心情を読み取ったりするようにしていきたい。

物語の主題は父のゆみ子に対して、「こんな世の中でも強く生きてくれ」や「かけがえのない自分の命を大切にして、幸せに生きてほしい」と願う想いである。戦争が引き起こす悲劇さの中に、一つの家族の切ない物語があり、もう会うことができなくなってしまうかもしれない子への父の想い（成長・幸せ・命）が、一つの花に込められていると考える。

この物語は、直接的な表現で登場人物の心情が描かれていない。そこに読み取りの大きな難しさがある。逆に言えば、それがこの物語の面白いところであり、子どもたちの想像が大きく膨らむとも考えることができる。

本単元は、比喩表現を読み取ることが重要になってくるため、学習指導要領の（１）「ウ　場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読む」の指導に適している。そして、その想像をもとに、自分の考えを発表したり、聞いたりすることは「オ　文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気づくこと」に適している。

②　指導について

【情景を思い浮かべやすくする】

戦争を体験した人々さえ貴重になってきているこの世の中で、現代を生きる子どもたちがどの程度戦争を知っているのだろうか。本教材では戦争中の話であるため、当時の様子を読み取るには、時代背景をつかませることが必要であると考えた。三年生では、「ちいちゃんのかげおくり」を学習し、戦争について触れたが、その知識を活かしてもこの物語の情景を思い浮かべることはできないだろう。そのため、イメージしやすいよう、戦争について子どもたちに自由に調べさせることにした。これにより当時の生活の様子や、状況がイメージしやすくなると考える。また、戦争に関する資料を提示する。視覚的にも当時の様子が分かるようにしておきたい。そして、戦争に関する体験談も子どもたちに聞かせたい。これらを踏まえ物語を読み進めることで、子どもたちは比較的スムーズに入れるのではないかと考える。

【親の視点】

物語の主題は父のゆみ子に対する想いであり、父の心情を読み深めることが求められる。しかし子どもたちが考える物語の主人公、また共感的立場に立てるのは、恐らくゆみ子だろう。その為、父の視点から読むことができるよう、他教科とも関連をはかり、親の気持ちに触れる機会を作りたい。道徳では「母のせいきゅう書」という作品を扱い、親と子の愛情について話し合いたい。また、自分の親から実際に手紙をもらうことにする。親が自分のことをどんな想いで生んだのか、育てているのかを実感することによって、この物語でも親の心情を読みとりやすくなるのではないだろうか。これらをもとに、親が子を想う気持ちを読み取り、一つの花に対する父のゆみ子に対してこれからの成長や幸せを願った想いを、一人一人感じ取ってほしい。

【父の心情を読み取るための手立て】

今回初めて登場する「～でしょうか。」「～かもしれません。」といった、第三者的視点からの物語でもあるこ

とに着目できるようにする。それにより、違う角度からも物語を見ることができるという実感を伴い、より物語の面白さに気づくことができるのではないかと考える。そして想像をより豊かにするために、「～のように」などの比喩表現、「―」（ダッシュ）を抑える。これらを意識して読み進めることで、課題に向け具体的に迫っていくことができるようにしたい。

また、父の心情が分かりそうな部分に線を引かせ、それらを紹介し合い、話し合いやすいよう焦点を具体化させる。「○○した時の父のゆみ子への気持ち」というようにすることで、共通の課題となり、子どもたちが話しやすいと考える。子どもたちは、その父の気持ちを読み取るため、前後の文章内容に着目したり、文章の表現方法に着目したりするだろう。

そして、一つの花に込められている想いにより近づくため、それまでの父の心情の流れを子どもたちに把握させておきたい。その為、父の心情の流れがわかりやすいよう掲示物に残しておいたり、個人のワークシートに残しておいたりしたい。

③ 子どもの見取りと学習過程（課題設定をして読み取る）

子どもたちがもっと読みたい、知りたい、話し合いたいなど、興味がある部分がどこなのか把握するため、初発の感想・疑問を書かせることにする。子どもたちの関心がある部分をもとに、教師と話し合い、学習課題を設定して読ませていきたい。

物語は十年後の様子で終わっているが、その後のゆみ子について話し合いたい。十年後、父を忘れて生活しているゆみ子と、存在を忘れられている父の関係に、切ない感情を抱く子がいるだろう。そこで十年後のゆみ子の立場になって考えさせたい。そうすると父のことを知りたいと思う子がほとんどであろう。その思いに対して「父を知らないままでゆみ子は生きていくのだろうか」という疑問を持つことを期待したい。その疑問に対して「母が父のことを伝える」と大半が答えるだろう。更に「母は父のことをどのようにゆみ子に伝えるのだろう。」という思いが子どもの中に生まれることを期待したい。しかしどのように母はゆみ子に伝えるだろうと考えたとき、子どもたちは「父は死んだ」「体が丈夫でなかった」など、単に父の事柄を伝えると考えると思われる。そこで親からもらった手紙を読むことで、親が自分のことをどのような想いで産み育てているのかを確認したい。それにより、母がゆみ子に伝えるであろう父の内容は、父の事柄だけでなく、ゆみ子への想いやメッセージに変わるはずである。そこで父のゆみ子への想いを知るため、その想いが分かる部分を読み返す必然性に子どもたちが気づくはずである。

この物語は直接的表現が無いため、ゆみ子に対しての父の想いを読み取るのは難しいだろう。そのため、読み取れるのではないかと思う文章に線を引き、紹介し合いたい。その後に紹介し合った部分をクラス全体で一つ一つ話し合い、整理しながら父の想いをまとめていきたい。そして話し合うにつれ、叙述を根拠にした一人一人の想像がより豊かになっていくことを期待したい。

ゆみ子への父の想いが読み取ることができると子どもたちが考える場面は全部で三つであると考えている。一つ目はゆみ子をめちゃくちゃに高い高いする場面。二つ目は戦争に行くため駅まで父が見送られている場面。三つ目は、別れ際に父がゆみ子に花をあげる場面である。

一つ目二つ目の場面では、ゆみ子への父の想いが前後の文章から比較的読み取りやすいので、ほとんどの子が‘ゆみ子への将来の不安’と考えるだろう。その為、読み取った気持ちに関しての根拠に違いがあまりみられないかもしれない。しかし、三つ目の場面では、一人一人が考える父の想いに違いがみられると考える。その場面の状況を思い浮かべて考える子（泣き止ませたい・喜ばせたい等）、前後の文章に着目して考える子（ゆみ子へのメッセージ・願い等）が予想される。また、これまでの学習から、父のゆみ子に対する不安な要素が含まれた心情を辿りながら考える子もいるであろう。前の文章を読み返したり、今までの父の心情と比べたりすることによって、父の想いに迫っていけるよう期待したい。

そしてその後の父が汽車に乗って行く場面も関連づけて考えてほしい。にっこり笑ったこと。何も言わずに行ったこと。一つの花を見つめていたこと。など父の行動を追って読み、叙述をもとに想像を膨らませながら考えていくことによって、父のゆみ子に対する想いがより明解になっていくのではないだろうか。

そして父がゆみ子に花をあげたところを読み取りながら話し合うことで、物語の主題により近づいていくと考える。単元のめあてであった「母が父のことをどのようにゆみ子へ伝えるのか」ということも見えてくるはずである。心情を読み取ることによって、物語の主題でもある、親が子を想うはかりしれない愛情を感じ、自分たちはそんな親の愛情と想いを受けながら、日々生きているんだということに気づき、家族愛を育むことができるようにしたい。

④ 本時のねらいとひびき合いについて

本時では、前時に個人で読み取った「父はゆみ子へ花をあげたとき、どんな気持ちだったのか」について話し合う。この場面を読み取ろうとすると、叙述をもとに様々な意見がでるであろう。ゆみ子に対する父の想いの内容は同じでも、根拠の違う子もいるかもしれない。ゆみ子へ対する父の想いは、一体どんなことだったのだろうか。なぜそう思ったのか。こだわりを持って考えることで、自分の考えを伝えたい、人の考えも聞いてみたいという切実感が生まれるだろう。場面の状況を思い浮かべて考えていた子は、友だちの考えを参考にその後の父の行動に気づくことで、変化が生まれることを期待したい。ペア交流を取り入れることで、前時での自分の考えを確認し、自分の考えに付け加えをして発表することができるとよい。その考えをもとに、自分の意見を述べたり、相手の意見を受け入れたりしていきたい。また、想像は膨らませて欲しいが、根拠の無い想像にはしたくない。

そのため、叙述に沿った考えがでるよう指導していきたい。
　話し合うことによって一つの花に込められた父の想いに気づき、考えが変わっていく姿、また新たな考えを得ることができる姿をひびき合いとしたい。

4　単元の評価基準

| 国語への関心・意欲・態度 | 読むこと |
|---|---|
| ・叙述から想像をふくらませて読み、読み取ったことを進んで話し合おうとしている。 | ・場面の情景や登場人物の様子や心情を叙述に即して想像しながら読もうとしている。<br>・課題や主題について自分の考えをまとめ、一人ひとりの感じ方に違いがあることに気づき、考えを深めようとしている。 |

5　単元指導計画と評価計画

| 次 | 時 | ねらいと学習活動 | 評価規準と評価方法 |
|---|---|---|---|
| 一 | 1<br>2<br>3 | ○教材に興味を持ち、学習の見通しを持つ。<br>・物語を読み、初発の感想を書く。（感じたこと・疑問・話し合ってみたいところ）<br>・音読練習、新出漢字、語句の確認をする。<br>・登場人物、物語のあらすじを確認する。 | 【関】教材に興味を持ち、物語を読もうとしている。（発言・観察）<br>【読】登場人物、あらすじ、場面設定、会話分を理解している。（ノート・発言・観察） |
| 二 | 4<br>5<br>6<br>7<br>8 | ○課題を決め、文章から父のゆみ子への想いを読み取る。<br>・「母はどのように父のことをゆみ子に伝えるだろう」という課題を持つ。<br>・第三者的表現を知る。<br>・「―（ダッシュ）」、比喩表現を知る。<br>・父のことが分かる部分を、抜き出し、叙述をもとに読み取っていく。<br>・父がゆみ子に花をあげた場面に父の想いがあるかどうか話し合う。〈本時〉 | 【関】読み取った内容を進んで伝えようとしている。（観察）<br>【話・聞】自分の考えを分かりやすく話している。友達の考えを自分の考えと比べながら聞いている。（観察・発言）<br>【読】父の想いがわかる部分に着目し、文章を根拠に想像をふくらませながら読んでいる。（ワークシート・発言・観察） |
| 三 | 9<br>10 | ○ゆみ子に父のことをどのように話すのか考え、交流する。<br>・母の立場になってゆみ子への手紙を書く。 | 【読】父のゆみ子に対する想いを理解し、自分なりの考えを持ち、友達の考えと比べている。（ワークシート・発言）<br>【書】父の想いを自分なりにまとめ、書くことができる。（ワークシート） |
| 四 | 11<br>12 | ○同一作者の作品や戦争を題材にした作品を読み、紹介カードに書く。 | 【関】同一作者の作品や戦争を題材にした作品を進んでよもうとしている。（観察）<br>【読】登場人物、中心人物、、場面設定、登場人物の関係等、読みの観点に沿って読んでいる（ワークシート）<br>作者の思いや願いについて考え、作品についての感想を持てる。（紹介カード） |

6　本時について
（1）本時目標
　父がゆみ子に一つの花をあげた場面について、叙述をもとに話し合い、個々の感じたことを伝え合うことを通して、父のゆみ子へ対する想いについて読み取ることができる。

（2）本時展開

| 学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| ゆみ子に花をあげる時､父はどんな気持ちだったのだろう<br>・他にあげるものなんてない。この花で我慢してくれ<br>（おにぎり以外にこんな物しかない）<br>・忘れないで | ・前時の学習を振りかえらせる<br>・座席表に個人の考えを表記したものを配る<br>・全体で交流させる<br>・叙述に即した理由付けをさせるようにする |

| | |
|---|---|
| （コスモスをお父さんだと思ってくれ）<br>・最後は笑顔になってほしい<br>（最後の顔は泣き顔ではなく、笑顔を見たい）<br>・お父さんのかわりに大事にして<br>（コスモスを咲かせて、その時に思い出して）<br>・最後のプレゼントだ<br>（最後にあげたものだから）<br>・一つだけの命を大切にして<br>（一つだけという言葉から）<br>・強く美しく生きてほしい<br>（ゴミ捨て場のような・わすれられているようにと書いてあるから）<br>・心の優しい子になってほしい<br>（コスモスのようにと書いてある）<br>・泣き止ませたかった<br>（それをみてお父さんがにっこり笑ったから）<br><br>ゆみ子にお父さんのことを伝えよう<br><br>○ゆみ子に父の想いが込められた手紙を書く | ・友だちの考えを聞いて、自分の意見に付け足しができるよう発表させる<br><br>・叙述に則さない理由付けにならないよう気をつけさせる<br><br>・座席表をもとに、聞いてみたい人の意見などを交流させる<br><br>・父がゆみ子に花をあげた後の行動と関連づけて考えさせる<br>・答えは一つに絞らず、友だちの考えを聞いて自分がどう考えることができたのかを評価する<br><br>・単元の学習課題にもどらせる<br>・ゆみ子に父の想いを母の立場にからを手紙を書かせる<br>・友だちの考えを聞いて、叙述をもとに変わっていくことを評価する |

（3）本時の具体的な評価

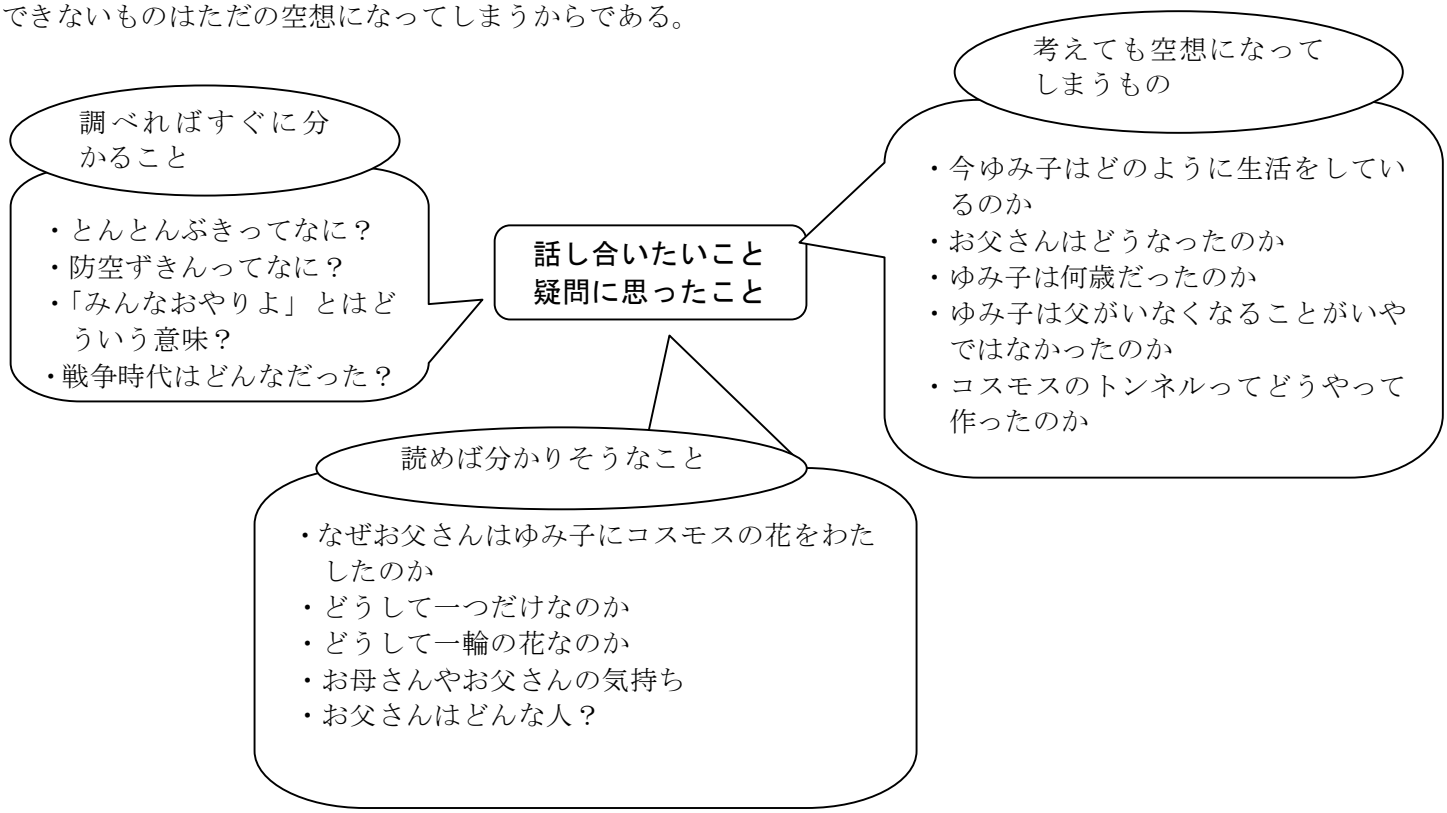
| | ◎　十分に評価できる | ○　おおむね満足できる | 努力を要する場合の手立て |
|---|---|---|---|
| | 父の一連の行動から、叙述をもとに一つの花に対する父の心情を想像し、ゆみ子に対してどのような想いがあったのか読み取ることができる。 | 叙述に即して、父のゆみ子に対する想いを読み取ることができる。 | 友だちの考えを聞いて、自分なりに父のゆみ子に対する想いを考えることができる。 |

7　実践を終えて

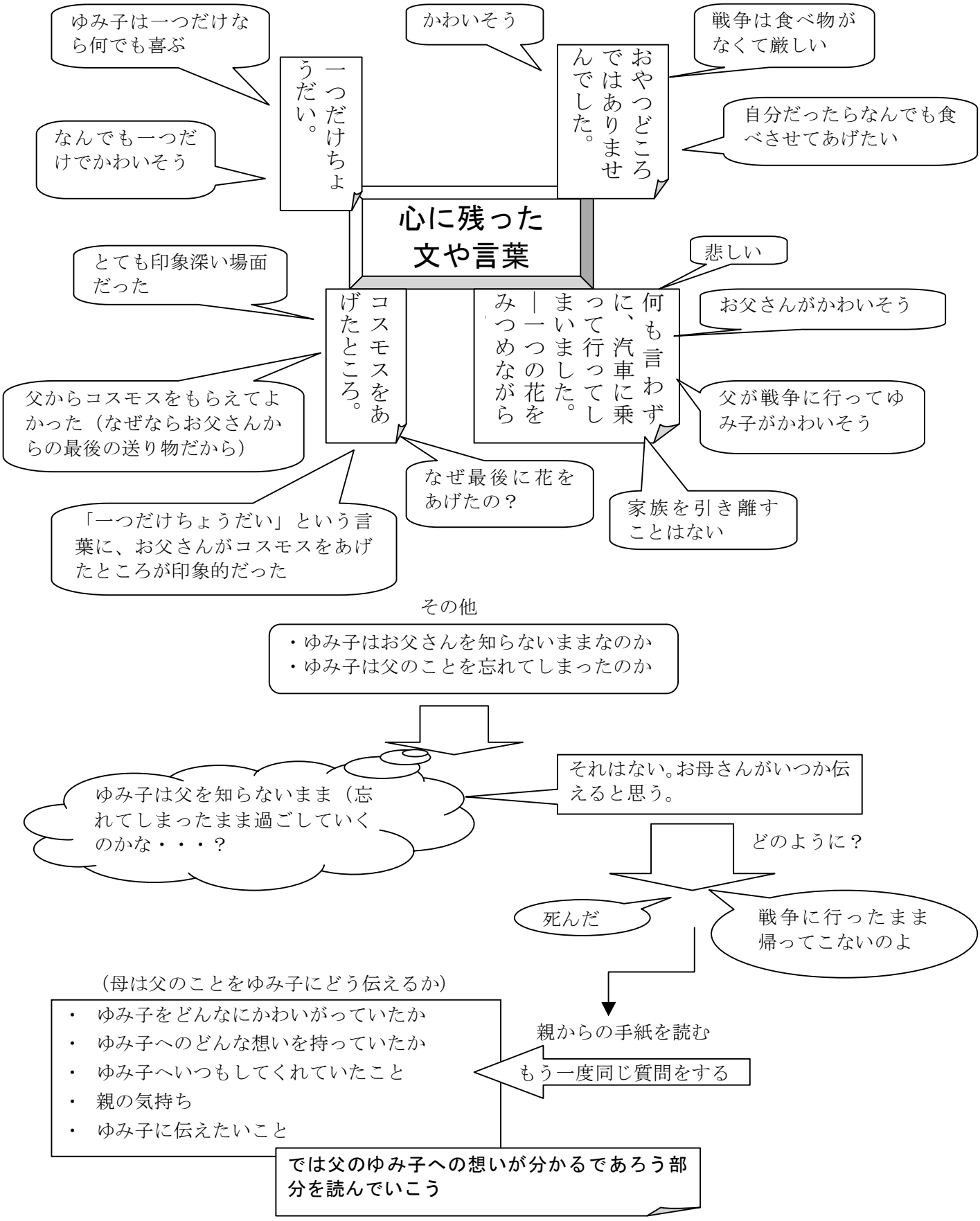
（1）　単元を通して子どもとどのように単元を作ってきたか

子どもの初発の感想をもとに「一番印象に残った部分」と「みんなで話し合ってみたいこと、疑問に思ったこと」を子どもたちで話し合い、課題作りを行った。

課題作りの条件として、物語から読み取れるものを課題にすることとした。なぜなら文章から読み取ることのできないものはただの空想になってしまうからである。



「心に残った文や言葉と初発の感想」




まず最初に物語を読み、個人で考える時間をとった。そこでどうしても分からない、解決できないものを交流し合った。一番印象に残った部分で多かったところは、父がゆみ子に花をあげる場面であり、またその場面に多くの子が「なぜ最後に花をあげたのか」という疑問も抱いていた。

そして「ゆみ子は父のことを覚えていなくてかわいそう」などの父とゆみ子の関係性に悲しさを感じている子も多かった。そこで「ゆみ子は父を知らないまま過ごしていくのかな」と疑問を持っていた子どもの意見とつなげることにした。すると大半の子どもたちは「母がそのうち父のことをゆみ子に伝えると思う」と答えた。それに対し「どのように伝えるの？」と投げかけた。そうすると「‘あなたのお父さんは死んだのよ’と言う」などの

父の気持ちの部分には迫らない浅い考えの答えが返ってきた。

そこで事前に各家庭に頼んで書いてもらっていた、自分の子どもへの思いを綴った手紙を読ませることにした。それにより子どもは、親からどのような想いで生まれてきて、育ててもらっているのかを知った。全員が親の想いに感動している様子であった。その後もう一度母がゆみ子にどのように父のことを伝えるのか投げかけた。すると「母は父のゆみ子への想いを伝える」と考える子がほとんどであった。

しかし、全員がゆみ子の父がゆみ子へ対して抱いている思いというのはどういうものなのか、はっきり分からなかったため「母が父のことをどのようにゆみ子へ伝えるのか」という課題が生まれた。そしてもう一度ゆみ子へ対する想いが分かるであろう部分を読み返していこうということになった。

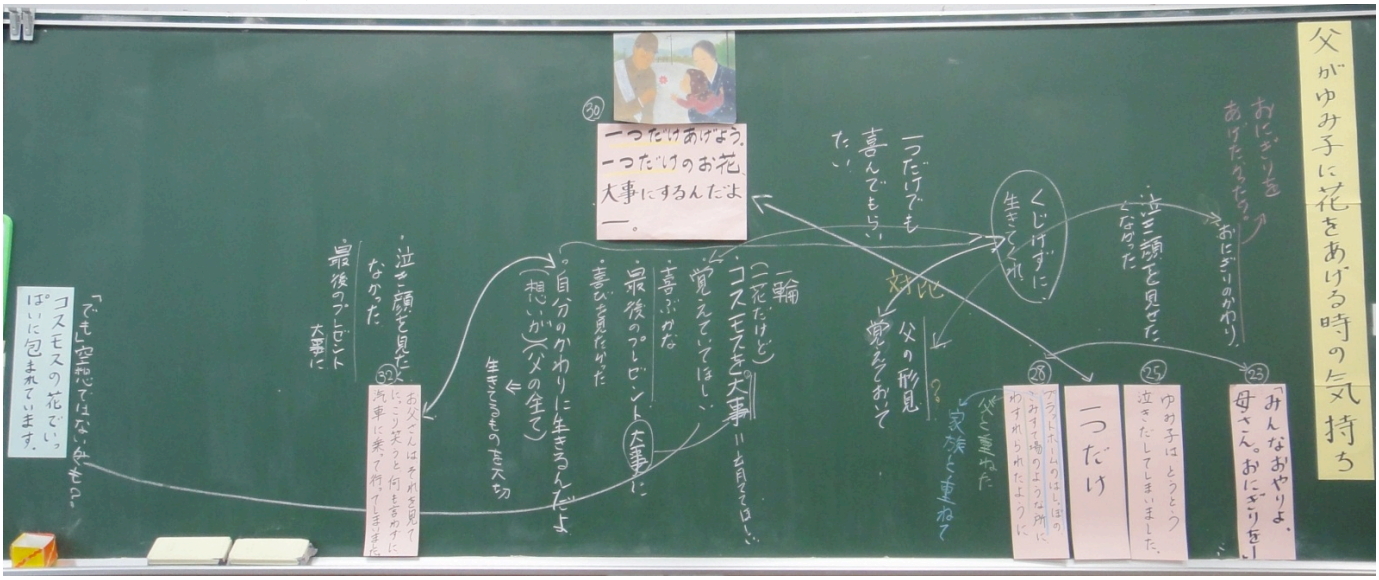
（２） 本時について

前時までに父の想いが分かりそうな部分を読んできた。一つ目は「ゆみ子を高い高いする場面」二つ目は「父が母とゆみ子に見送られる場面」である。

本時は「父がゆみ子に花をあげる場面」にも何か想いがこめられているのではないかということから、この部分について話し合った。

本時では、文章をもとに根拠を見つけ、自分の意見を述べることができた子が多かった。本時までに父の想いが分かるであろう部分を読んできた。本時の課題に対して子どもたちは、この場面を読み取ることができれば父の思いがより分かりそうだという切実な思いを持ちながら学習に望んでいたと感じる。

自分の考えと友だちの考えを比べながら、似ている考え、共通する部分などをつなげていくことで、父の思いに迫っていこうとする姿が見られた。




（３） 成果と課題

成果としては、単元を通して子どもの思考にそった流れで学習を進めることができた。また課題を共通化することで、一人一人が読み取ったことをお互いに伝え合いながら一つ一つ課題をじっくり解決していくことができた。

ひびき合いという部分では、子どもたちが自分の考えを伝え合いながら、共通していく部分や新たな気づきを生むことができたという点がよかった。しかし、クラスの一部の子たちで学習が進んでいってしまったところもあるので、もっと全体に投げかけ、全体でそのような姿が見られればよかった。また同じ文章からでも子どもによって読み方が異なることがある。その場合、答えを絞ろうとするのではなく、一人一人の読み方を尊重できるような話し合いの姿になればもっとひびき合うことができたのではないだろうか。

今単元は、子どもたちの考えを中心に作り、父のゆみ子への想いが分かるであろう部分を読み進めていった。「一つの花」の物語には、父がゆみ子へ接する場面は全部で３ヶ所しかなく、その部分だけに目が向いてしまい、物語のそれ以外の大切な部分をじっくり読むことができなかったように感じる。今後、教師が教材分析をした際に考える、教材として子どもたちに考えてほしい部分をどのように扱い、どう読ませていくのかということが課題である。

また、文章から根拠を見つけられず、空想の読み方になってしまっている子が何人かいた。その子たちに対し、個別での支援や、上手く文章から根拠を読み取れている子を紹介するなど、一人一人への適切な支援が必要であろう。